

# 台本のない映画 世界に発信していきたい



## 山崎エマ氏

ドキュメンタリー映画監督

神戸生まれ。イギリス人の父と日本人の母を持つ。19歳で渡米しニューヨーク大学映画制作学部を卒業。日本人の心を持ちながら外国人の視点が理解できる立場を活かし、人間の葛藤や成功の姿を親密な距離で捉えるドキュメンタリー制作を目指す。長編初監督作品『モンキービジネス：おさるのジョージ著者の大冒険』ではクラウドファンディングで2000万円を集め、2017年ロサンゼルス映画祭でワールドプレミア。2018年日本で劇場公開。長編2作品目の『甲子園：フィールド・オブ・ドリームス』では夏の甲子園100回大会を迎えた高校野球を社会の縮図として捉えた。最新長編作『小学校～それは小さな社会～』は2023年秋の東京国際映画祭でワールドプレミア、2024年公開予定。その他NHK大河ドラマ『いだてん』『ノーナレ』『ETV特集』『BS1スペシャル』『クローズアップ現代』の製作に携わる。

英国人の父とは英語日本人の母とは日本語で会話する  
自分を突き進めさせたイチローのメッセージ  
映像に興味をもってニューヨークへ  
自分が感じたことを伝えるドキュメンタリーの魅力  
作りたいたのは「日本がテーマのもの」



# ドキュメンタリーは 日本の凄い所をいずれは

小学校6年間の経験によって日本人の当たり前前が形成され  
日本で当たり前前のことが凄い事だと海外で気づく  
自分の役割は気づけたことを作品にし  
言葉だけではなく映像を通して未来を創ること  
生きてきたことよりより良い未来を残せる活動を・・・



## 村上由美子氏

MPower Partners Fund L.P.  
ゼネラル・パートナー

上智大学外国語学部卒業、スタンフォード大学院修士課程 (MA)、ハーバード大学院経営修士課程 (MBA) 修了。その後約 20 年にわたり主にニューヨークで投資銀行業務に就く。ゴールドマン・サックス及びクレディ・スイスのマネージング・ディレクターを経て、2013 年から 2021 年まで OECD (経済協力開発機構) 東京センター所長を務める。OECD の日本及びアジア地域における活動の管理、責任者。政府、民間企業、研究機関及びメディアなどに対し、OECD の調査や研究、経済政策提言を行う。ビジネススクール入学前は国連開発計画や国連平和維持軍での職務経験を持つ。ハーバード・ビジネススクールの日本アドバイザーボードメンバー。内閣府、経産省、外務省などいくつもの政府委員会で委員を歴任。2021 年 5 月 ESG 重視型グローバル VC ファンド、MPower Partners を創業、ゼネラル・パートナーとして就任。著書に「武器としての人口減社会」がある。

イチロー選手に憧れて  
探した「自分の道」

**村上** 今日は、次の世代の代表者というところで、ドキュメンタリー映画監督の山崎エマさんを推薦させていただきました。宜しくお願ひします。

**山崎** こちらこそ宜しくお願ひします。村上さんとはずいぶん長いお付き合いの様な気がしますが、実際には3、4年ですよね。私の夫は映画プロデューサーのエリック・ニアリと言いますが、現在MPowerで一緒にいるのですが、現在MPowerと一緒にいるのがプロデューサーした映画に写真出演されたりしたことで、私も美和さんと知り合いになって、そこから村上さんとの縁に繋がっています。『脇役物語』という映画だと思っています。

**村上** 大昔、エリックが映画を作っている時に、このMPowerと一緒に起ち上げた30年来の友人の関美和さんのご自宅で撮影したという関係で友達になって、そしてエリックとエマさんは結婚された……ということで美和さんとエリックを通して、「飲みに行く」とか「食事に行く」とか「ベビー



山崎エマ氏

シャワーをやるう」とかお付き合いをしています。

**山崎** しかも、ベビーシャワーを2回もしていただいて。

**村上** ベビーシャワーというのは日本ではあまりなじみがありませんが、これから産まれてくる赤ちゃんをプレゼントのシャワーでお祝いをする会です。元々は、お母さんになる女性と、周りの女性達が行うアメリカの伝統文化でしたが、現在は男性も参加して祝うことが多くなっていますね。

**山崎** 知り合って徐々に私の作品を送ったりする間柄になって、アメリカの選挙の日に甲子園の映画を観ていた

だいたのを鮮明に覚えています。

**村上** 私の主人もアメリカ人ですが、エマさんの作品を観ても感銘を受けています。世界的に有名な作品で特にアメリカでは良く知られている『おさるのジョージ』という子ども向けの絵本を題材にして作った映画を観て、「エマは天才だ〜！」と感動して叫んでいたことがあります。今日は、エマさんがどんな方なのかを紹介したいと思ってお声かけ致しました。

**山崎** ありがとうございます。

**村上** エマさん、実は日本生まれの日本育ちです。見かけは「どこの人だろう？」という感じですが、まずは生い

立ちからお聞きしていいですか？

**山崎** 父はイギリス人ですが、生まれも育ちも日本、大阪や兵庫県西宮市で育ちました。

**村上** お父様はどうして日本にいらっしやったのですか？

**山崎** 二十歳を越えた若い頃、1年間英語を教えに日本に来てそのまま40年近く……という感じですよ。

**村上** 日本が気に入ったのですか？

**山崎** 父も母も教育者の家系で、基本的に日本にいながら、年に何回かイギリスや海外に行くという様な生活でした。映画の勉強をしたくて19歳からニューヨークに行きました。アメリカの大学に行って20代はほぼニューヨークで過ごして、その後ニューヨークと日本を行ったり来たりしていますが、最近では日本にいる時間が長くなりました。結局作りたいのは「日本がテーマのもの」が増えているので、日本に拠点を置きつつ海外へ仕事に行く形です。

**村上** ということは、ルーツは日本という感じですね。お母様は日本人ですか？

**山崎** はい、母は日本人です。私は公立の小学校を卒業して普通の日本人



だったと思いますが、見かけから「日本語上手だね」と言われることもあり、複雑な想いもあってそれで日本を一度出たりしたのですが、今は、自分は日本人であり外の人でもあり、と良いところ取りをして過ごしているつもりです。

**村上** 日本の学校に通っていたのですか？

**山崎** 小学校は公立で、中高は神戸のインターナショナルスクールで、その後アメリカの大学に行きました。卒業後、しばらく仕事をして日本に帰ってきました。

**村上** 面白いバックグラウンドをお持ちですね。それも関西で。

**山崎** そうですね。今では考えられませんが、小さい頃は周りにハーフの人もなく、英語が話せることが自分のよくない部分だと勘違いする程でした。父とはずっと英語で話していましたが、外ではちょっと恥ずかしかったです。今では自分の強みになっていますがそんな環境でしたね。生まれた時から父とは英語、母とは日本語という風に育てられたので、自分の息子にもそうしています。

**村上** バイリンガルというのは実はす

ごく難しいですね。この人は英語を話す人、この人は日本語を話す人として分けないと、子どもが混乱しますよね。

**山崎** そう。英語も日本語も普通に話せるのに、「英語上手ですね」「日本語上手ですね」と両方に言われて、当時はどうしていいかわからなくなっていました。嫉妬などもあって、小さい頃は自分のホームである日本に複雑な想いがありました。日本を出てアメリカに行く、今まで日本にいて当たり前だった事、例えば電車は時間通りに来るし道も綺麗だし等、初めて日本の良さに気づいたのが大学生の時でした。



村上由美子氏

その頃から徐々に当たり前に、日本の凄いをいずれば世界に発信していきたいと思うようになっていました。ご存知の様に海外では、日本は「寿司」「刃箸」「マンガ」という限られたイメージで、もちろんそれも日本の文化のひとつですが、もつといろいろある日本の良さをもしかしたら自分が発信していける人になれるのかな」と思ったのが、Uターンしたきっかけでした。

**村上** 私の息子が全く同じ事を言っています。日本で育った長男はアメリカに行つて2年経ちますが、先程エマさんがおっしゃった様に日本にいた時にはあまり考えなかったけれど、社会の

一員としての責任とか立ち位置に対して、高い美意識を持っているということとをアメリカに行つて初めて気づいたと言っていましたよ(笑)

**山崎** 本当に今まで当たり前過ぎて何とも思っていなかった事に、日本に帰ってくるたびに感動することが沢山あります。もちろん全ての面でいい所と悪い所は表裏一体だと思います。アメリカのいい所は個人の主張があつて皆で競い合つて高めていきます。日本だけにいる日本人の人達が当たり前だと思つて暮らしていたら、正直、私より幸せではないのでは……。その日本にいる幸せ感が増えたからこそ、戻つて来られる様になつて日本に住もう、ここで子育てをしようと思える程のきっかけになつたのです。何かを見るとき、「視点」で追うのはとても大事だと思います。ドキュメンタリーフィルムメーカーの私に出来ることはそれを活かす作品を作ることです。ドキュメンタリー映画は私が言いたい事を伝えるもので、記録ではありません。私なら日本の中と外、両方が分る人としての視点、しかもハーフとして、様々な「ならでは」のものをやる、この職業を一生をかけてやりたいと思っていました。

**村上** そもそもどうして映画監督に  
ろうと思ったのですか？ 小さい頃か  
らそういう気持ちがあったのですか？

**山崎** その答えを言うに当たって絶対  
に欠かせないのが、野球選手のイチ  
ローさんです。小学校6年生の時に読  
んだイチローさんの本で「好きな事を  
見つけて努力すれば夢は叶う」という  
メッセージを受け取りました。当時、  
彼はその年にメジャーリーグに行く様  
なタイミングで、その後10年以上大活  
躍されたのですが、それを見た時「と  
にかく何か自分が得意になる事を選ば  
ないと。イチローさんは3歳から野球  
をやっていたのに、私はもう12歳で9  
年も10年も遅れている」と思いなが  
ら、自分が好きになりそうな事を探し  
ました。それがたまたま中学校の時に  
触れたビデオメイキングというか、当  
時はまだ三角のカラフルなiMacが  
学校にも普及した時代で、これなら興  
味はあるはまだ下手くそだけど10年も  
かければ一流になれる、そういう道が  
見えた気がしたのです。イチローさん  
が自分のヒーローだったので、大きな  
夢を持って努力すれば叶わない事など  
ない、と自分に言い聞かせて10代を過  
ごしました。「映像」というものに惹

かれて、21世紀のこれからの職業で  
もあるし、アメリカに行こうと思っ  
たのも、正直イチローさんが自分をより  
高める為にアメリカに渡った様に、勉  
強するならその産業が一番栄えている  
場所に行つて一流になりたいと思っ  
たのです。もちろん途中嫌な事があつた  
り、「才能ないな」と思つたりしたこ  
ともありますが、ひとつのことをやり  
続ける、そしてまだまだこれからだ  
が、何か自分が感じた事を伝える、ド  
キュメンタリーという職業にすごく魅  
力を感じています。ある時は『おさる  
のジョージ』のプロに、又ある時は『高  
校野球』のプロに、そして『日本の小  
学校教育』のプロになったり、題材に  
よつて違った事を知ることができ、  
毎日違う経験が出来る仕事でもあるの  
で永遠に飽きないと思います。

**村上** そんな風に「これになる」と  
思つて実際に実行していくところが  
素晴らしいですね。特に映画監督なん  
て競争の厳しい世界ですし、夢を持つ  
ことはできても、そこに辿り着く為  
に様々な行動をして前進していくのは、  
なかなか難しいと思いますが、挫折と  
か「ああ、もう駄目だ！」みたいなこ  
とはありませんでしたか？

**山崎** あります、あります。社員の  
経験もないし、「こうすれば監督にな  
れる」みたいなルートも保証もありま  
せん。ある意味アーティストみたいな  
道ですが、私の様に行つたり来たりす  
る例が見当たりませんでした。最初は  
映像を編集する助手からスタートし  
て、他の監督さんの作品を編集する立  
場として、更に仕事になったり又そこ  
で学ぶことも多々あります。今、長編  
映画を3本作っています。その合間に

テレビの仕事や興味があることを仕事  
にする努力をし、毎年、毎月、今でも  
この先2か月後に何をしているか分か  
らない程である意味先が見えませ  
ん。公務員のように安定している職業を  
やっていた親から見れば、驚きのアド  
ベンチャーの様に思えるでしょうね。  
もちろん不安になる時もありますが、  
やりたい事を成立させる為のお金やそ  
ういう道を探る様な事も何とかでき  
ています。そこでチャンスをもたらした  
にそれに向けて他の仕事でお金や時間  
を溜めて、ある意味お金がすぐに入ら  
なくてもやっていける基盤を作つてバ  
ランスを取っています。ですから不安  
よりは冒険という感じで今日迄これ  
たのかな、と思つています。

**村上** 苦しくても楽しい、みたいなね。  
**山崎** 苦しくて苦しい時もあります  
が、それはそれぞれの作品の中での悩  
みです。ドキュメンタリーに出てくる  
人達との人間関係や、この前の作品だ  
と700時間の素材を90分にする際  
に多くの年月と悩みがある様な、個別  
な悩みの方が多いです。キャリアに関  
しては「これをやる」と決めているの  
で何とかなるという感じですね。

### 小学校と甲子園に見る 「日本」の社会

**村上** 『小学校』それは小さな社会』  
という最新作についてお伺いしたいの  
ですが、英語のタイトルは『THE  
MAKING OF A JAPANESE  
ESSAY』で「日本人の作り方」って何  
ですか？でも、正にそうですね。

**山崎** 『小学校』それは小さな社会』  
は先日『東京国際映画祭』で初上映  
された作品です。英語のタイトル『THE  
MAKING OF A JAPANESE  
ESSAY』の直訳だとあまりにも  
インパクトが強いので……。

**村上** 日本語の映画に英語字幕がつい  
ていたバイリンガルの作品になってい

ますね。

**山崎** ある公立の小学校に1年間通って、入学してくる1年生と卒業していく6年生を中心に、その6年間で造られていく人間達、団体や個人のストーリー、その土台を造っている先生方を含め、様々な人の話を聞いています。主役が「学校」という場所で、そこに10人程の人間達のストーリーが描かれる話ですが、私がこれを「やりたい」と思ってから間もなく10年近くの時間がかかっています。日本人というのは産まれた瞬間に日本人ではなくて、この6年間の小学校を経験することで日本人の「当たり前」が形成されるのでは……と。掃除や給食の配膳など、自分達で自分達のことをやるという当たり前過ぎる事は、実は日本でしかやっていないのです。

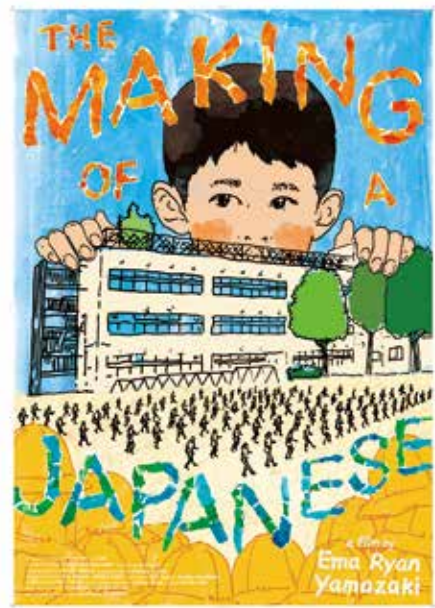
**村上** ホントにそうですね。例えば給食の配膳、自分達で教室を掃除するというのは、日本の小学校では当たり前で特別な事ではないですよ。現在、私の子ども達はアメリカンスクールに通っていますが、その発想がありません。まず、掃除をする人は別にいて自分達が使う教室はその人が掃除をするというのが普通です。給食もクラスの中で給食の担当があるのに、全くそういう観念がなくて理解ができないのです。その理解できない子ども達を見て、ちよつと残念な気持ちになりましたね。せつかく日本にいるのにインターナショナルスクールに通うと、その「当たり前」が当たり前ではなくなってしまう。私がすごく残念に思っているのは、社会のコミュニティの中の一員として、自分の事だけではなくてコミュニティの中の人の事も考えながらコミュニティを作っていく、「普通の責任」という感覚が多分、日本の小学校の経験をしなないと養われない……すごく分かります。

**山崎** 『小学校〜それは小さな社会』と日本のタイトルにしたのも、日本の小学校はある意味、社会の準備というか理想の社会を自分達でつくる、だから、窓を開ける係、電気を点ける係、日直もありますし。

**村上** それに黒板を消す係とかね。

**山崎** しかも平等で、日直も当番制で毎日違う子が担当する、その辺が当たり前過ぎてその常識が日本の社会に移るのです。私は日本の小学校を経験してからインターナショナルスクールに通ったので、まず初日「いつ掃除をするのかな」とずっとそわそわわわわいて、放課後に大人の人がしてくれるのを見て衝撃を受けました。でも、私にとって当たり前ではないから、逆にその人達に対する感謝も生まれます。放送委員や保健委員、体育委員もそうですよね。自分達でやるのが基本であれば、状況が変わった時にそのありがたみを感じるので、すごいシステムだと思います。もちろんそれも完璧な制度ではなくて、様々な面が諸刃の剣という言い方をする専門家の方もいますが、表裏一体で問題が起ることもあると思います。海外の人に「どうして日本はこうなの？ 電車も時間通りに来るし」と訊かれた時に、答えになる

かどうか分かりませんが、小学校に一度行ってみるとかこの映画を観てみると、ヒントがあるかもしれないと思って、この映画を作ったということもあります。その前の高校野球の映画『甲子園〜フィールド・オブ・ドリームス』も似た様なテーマで、海外の人に「どうして日本はこうなの？」と言われた時に、良い面もちよつと疑問な面も「これが私の答えではなく提案です」と日本の社会の究極の部分、海外の人も意識しつつ自分なりの経験で私ならではのことで、高校野球を舞台に選びその後小学校を選びました。日本人は生まれながらにはなく、だからもちろん変わる可能性もあると思



『THE MAKING OF A JAPANESE』  
(邦題：『小学校〜それは小さな社会』)

©THE MAKING OF A JAPANESE / Cineric Creative



ます。

**村上** 良くも悪くも、ですね。

**山崎** 日本の中にだけけると、自分達の良さに気づけなかったり、良い所まで変わってしまう。教育改革なども大事ですが自分達の良さに気づかないまま変わっていくと、気づいた時には良い所がなくなってしまうているかもしれません。先日、エジプトで日本式教育が流行っているというので取材に行きました。エジプトでは「凄いことだ」といつているのに、日本では子ども主体の活動が削られていくという本末転倒の状況になっていたりしています。その辺を含めて、自分の役割というか生きがいとして海外に行きやすい環境にいる自分がこういう事を提案するのがいいのかなど。日本を出たからこそ日本を批判的に見たい部分や不満も沢山ありますが、自分は気づけた事を作品にして発言し、日本の良さを伝えたい。「でもここは……」という所も併せて、良い所を褒めるのも忘れずに作品制作活動をやっています。

**村上** この映画は様々な人に観ていただきたいですね。アメリカやヨーロッパの映画祭も周るのですか？

**山崎** 先に海外の映画祭を周った後、

日本での公開や各国で配信放送するプランがありますので、もう暫くしたら誰でも観られると思います。日本は海外で話題になったりすると逆輸入で「観てみよう」となったりします。高校野球も同様で、視点を変えようと野球に全く興味がなくても日本社会の縮図の様に見えると思つて作品を作っています。

**村上** 日本でも来年には観られるのですね。

**山崎** 来年の夏頃でしょうか。

**村上** 皆さんまだ観ていらつしやらないのであまり暴露したくないのですが、これはやらせないドキュメンタリーなのです。卒業の時、子ども達と先生の絆が1年間ですごく強く育まれて、最後、先生にも子ども達にもすごく強い気持ちがあつて、春が来る前には卒業で別れがあるのですが、そのタイミングですね。私、泣いてしまいました。私だけではなく、皆ティッシュを出していて、もうびつくりしました。**山崎** 多分、子どもを見るということは大人になった時にいろいろ思い出したりすると思います。日本では教育という部分は特にこれからの未来を創っていくところで、それに焦点を当てて

映画を作り、社会に影響を与えたい、新たな視点を持つてもらいたい。その意識が、こんなにも心が動く大切なものだと認識してもらえたら、映画は人の心を動かし世界に貢献出来るように。私の映画の中で描いているような勉強ではない部分があったん減つて、「特別活動」と日本では言いますが、その辺を何か感じたのなら、政府や教育関連の人達に何か考えてもらえたらな、とも思います。結果として、皆あれだけ泣いたりしたというのは、心が動くという分かり易い結果ですから。

**村上** 甲子園の映画でも泣きました。泣かせますね、エマさん。甲子園に行けるチームも行けないチームも日々努力する、その姿を撮っていて、又も泣いてしまうのですが、あれは何年前に撮影されたのですか？

**山崎** 甲子園100回大会ですから、5年前ですね。

**村上** 5年前ですか。今年の甲子園で、「丸坊主でなくてもいいのでは」という話がありましたね。そのきっかけになるようなエピソードが2018年のあのドキュメンタリーに入っていますよね。あれ、おもしろいな、と思つて。

**山崎** 5年前に撮った映画なのに、大谷翔平さんの母校の花巻東高校の佐々木洋監督が100回大会の時点で「高校野球には古くていいものも沢山あるけれど、これを機に坊主をやめよう」と、甲子園によく出場する有名校としてはほぼ初めての発言でした。

**村上** 象徴的な学校としては、ね。

**山崎** あれから5年。今年は優勝したチームの慶応がそもそも坊主ではなかったという複雑な事情がありますが、でも甲子園のベスト8の内3チームが坊主ではなかった……。

**村上** 考えられません。もう、甲子園は皆坊主、というイメージでしたから。

**山崎** 坊主が悪いというのではなく、いろいろなニュアンスあるのですが、「そうやってきたな」という実感は凄くあります。

**村上** 2018年、まだまだ坊主が当たり前の世界のタイミングで、あの言葉を記録できたのはすごい先見の明があるドキュメンタリーだったと思いますね。

**山崎** もちろん坊主の話聞いた時に、何が何でもこの場面を映画に入れないといけないと思つたのは、予測はできませんでしたが自分がそういう方

向にメッセージを込めていてそうやってきている、という感じですね。

**村上** そうですね。そこがエマさんの天才能ですよ。素晴らしいと思います。今回の小学校のドキュメンタリーも、教育の専門家からすると日本の集団生活の中で学ぶことに関しては大変有意義な所もありますが、その集団主義というところには、ネガティブな面もあって、個性を生かす、自分とは違うという所にポジティブな感情を持って子ども達が育つというのは、日本の教育現場としてはまだまだそこに大きな問題があります、と皆で議論する場面がありました。それも結構すごいメッセージがあると思いますね。

**山崎** 私の小学校時代と比べて個人を尊重するというのは、思っていたよりも進んでいて良かったと思います、そこで失われるものは……。私の時代なら「怒られる」筈でも子どもを尊重し、子どもの人権を大切にとは思いますが、緩くなって今は怒られなくなっています。個人の意見とかが意外と今の小学生は育まれている様な気がします。その一方で、「集団」や「団結」という言葉に対して日本社会はダーティーワードの様な感じに受けと

める人達が増えていきます。個性を活かしつつ今はまだ残っている小学校の班に分かれて「学校の為に」や「クラスメイトの為に」などのメンタリティーは、日本の良い所でもあります。力を合わせる喜びや、個人ではできないことを皆で達成するのは、アメリカとの一番の違いです。だから凄いいいのもありますが、日本の「協力して調和する」中で個性も生かせる様なバランスが取れば、日本はより進化していく筈です。日本の社会はできるだけ良い所を残しつつ、「少しでも駄目」という所に気づくというのが大事かなと思っています。

### ドキュメンタリーで より良い未来を創りたい

**村上** 日本の集団への意識などは、エマさんが作る映画のメッセージ性に繋がっていると思います。そういうメッセージ性を発信していくことによつて、「エマさんの気づき」が「社会の気づき」に繋がります。もしかすると「国」の様なものも大きなレベルでの気づきに繋がっていく様な、これから社会がどうなつて国がどうなっていくのかと

いう方向性を、ドキュメンタリーという媒体を通じて示しています。ドキュメンタリーなので台本があるわけではないですがそんな感じなのでしょうね。

**山崎** 劇映画やフィクションだと、監督が誰でその人の作品だという意識があると思いますが、ドキュメンタリーは特に日本ではまだまだ「記録」「オブジェクティブ」の印象があります。私にとつてドキュメンタリー作品は、あくまでも私の視点です。もちろん撮つたものやそこに描かれているものは実際に起こつたことですが、膨大な時間をかけて撮影した中で伝えたいもの切り取つて、そこに何百回通つた自分が感じた事を限られた時間内にまとめます。

**村上** 1年間撮つたものを90分にまとめるなんて想像がつかえません。**山崎** それはもう、吐く様な思いなのです。結局、ある人間の視点であり意見の作品で、観ている側にとつても主観的な情報ではないのです。ドキュメンタリーは日本ではまだジャンルが一定の幅で、「ナレーションがない」とドキュメンタリーではない、「又」高齢の人しか観ない」などのイメージがある

ので、ドキュメンタリーの観方のアップデートも必要だと思います。自分ができるのは、そこにある映像と音で膨大に撮つて切り取っている人間達について、伝えたいことがある、同意ではなく提示をして議論のきっかけを作ることなのです。しかも、観ていて笑いあり涙ありのエンターテインメント性もあって、心が動くようなストーリー性があるものを作っていけば、もう少し世界と対等になれるのではないのでしょうか。アメリカやヨーロッパがこの10年、15年でドキュメンタリーが飛躍している中で、日本はまだ元々の概念から抜けられずにいるので、その辺りも自分の中では挑戦なのです。

**村上** ある意味、日本のドキュメンタリー業界に伸びしろがあるという意味でもありますよね。

**山崎** そうだと思います。私の作品は「ドキュメンタリーだと思えない」とよく言われます。

**村上** 本当に台本があるのでは、と思う程ですね。

**山崎** でも、高校野球など、どこが勝つか分からないで撮っているわけですから……。

**村上** あれはすごく大変ですよ。予



選から追いかけているのでしょうか？

**山崎** 映画に一切入っていない学校も撮影しておかないと、何かあった時に対応できません。ただ、日本は欧米に比べてドキュメンタリー界に対する注目度、予算も規模が違います。1年間やれる人はなかなかいません。私もその為に、前後に他の仕事で埋め合わせをして何年も準備をして環境を作っています。ドキュメンタリーの面白さとか価値にまず視聴者が気づいてそしてニーズが生まれ、投資をする人達が増えていったらもっと多くの可能性が出て来ると思います。自分達でやっていくにはもっとドキュメンタリー界の改革や「自分の意見を言うツールにしていい」という事がもう少し分かれればいいのか。しかもナレーションや監督が出るというやり方だけではなく、「私の視点」「ある監督の視点」というものがアートフォームみたいに観られるはじめたらもっとできる事はあると思います。

**村上** すると次はどんな作品になるのでしょうか。私は「サラリーマンの作り方、やりませんか？」と以前から言っているのですが……(笑)

**山崎** まだ結果が見えていませんが、

コロナで世界も日本もかなり変わっています。何が変わったのか、これから見えてくる筈です。日本をテーマです

でに2本作ったので、3部作にしたいと思っています。コロナ後には、世界にも分る様な日本の企業や日本らしい所、変わり時なのか、ある場所を見れば今後の日本が見えてくるのではないかと、みたいなね。そういう舞台を選んで、何年かいて感じた事を自分なりに表現できたらいいなと思います。働き方改革は賛同ですが「もう、帰ります」みたいな感覚を持った若い人達がいる一方で、大きな夢を持っている人達は凄く働いて自分の技術を磨かないと何とできないと思います。日本では個人が頑張りすぎて社会が発展していった一方で、不幸な人達がいる時代もあったかもしれないですが、この感覚、自分がかいと思っている所に向かっているのかどうかも含め、大人達それも先輩の社長クラスの方々とかこれからの新入社員、40歳から50歳の年齢差を見ていくと又何か自分が感じるものや多くの人を感じるものもあるのかな、と思います。

**村上** トラディショナルな日本の会社で新入社員の1年と、定年退職まであ

と1年程の人のドキュメンタリーを同じ会社で同時に撮ったら面白そうですね。

**山崎** それと、中間管理職の人ですね。日本を代表する様な会社なら説得力がありますし、そこを見れば日本が分ると。きつとこんな企画引き受けてくれる環境はなかなかないと思うのですが、高校野球も小学校も「絶対撮れない」と言われたので、自分でたくさん調べて、思いをぶつけて、そういう環境を探していきたいと思います。

**村上** そうですね、そういう日本の会社を探したいですね。

**山崎** 是非、推薦して下さい。

**村上** ちょっといろいろ考えないと……。それから、イチローさんのドキュメンタリーはどうですか？

**山崎** それは自分がドキュメンタリーの道を選んだ中学時代に掲げた人生における最終目標です。何万時間という試合の映像や様々な時代の彼の姿、彼の言葉をドキュメンタリーの形にして、いつか自分の孫が彼の事を知る為の作品で、彼がいたから私がある、そしてイチローさんを見ることで彼の人生だけでなくその間の日本とアメリカの関係や、それに影響された人達の話

を含めてというチャンスの為に準備もしています。

**村上** いろんな事ができそうで楽しみです。そもそも野球はお好きですか？

**山崎** イチローさんを通して野球を知り、野球を通して人生を考える様になったからこそ、高校野球を通して社会の縮図を描きたいと思ったので、結果として野球は大好きですね。

**村上** 自分で実際プレーするので、か？

**山崎** 影響を受けて中学校の時はソフトボールをやっていました。ユニフォームに自分の名前の代わりに「イチロー」と書いて、本来右打ちで全然打てないのに左打席に立つたりする程、影響を受けていました。好きな事を見つけてそれに向かって大きな夢を持ちたいと思わせてもらったのです。

**村上** お子さんが生まれて、ご自身が一番変わったと思うのはどこですか？

**山崎** そうですね、結構チャレンジ的な1年だったと感じています。今まで通りにはできませんが、母である喜びを感じつつ、息子の為にどういう人間でいたいのかをすごく考えます。仕事とのバランスを取るのには難しいです



対談を終えて

が、自分の生きがいになっていっているものを継続したい気持ちは強いので、一旦ちよつと休んでも思えないのです。海外と比べると保育園はとても素晴らしいし、周りの人の助けを借りながら、新たな親としての立場で社会を見られる様になっていく事がもしかしたら今後の自分の仕事に影響してくるのではと思います。

**村上** エマさんの息子さんは何人として育つのでしょうか。日本で育つと国籍に関わらず「日本人の作り方」のようになるのかな……。

**山崎** 夫はアメリカ人なので息子も見た目はかなり外国人ですが、日本生まれの日本育ちで、見られ方と本人の自身が違ってきます。現代は様々なハーフの人達も沢山いるので、彼は

「世界に僕みたいな人は自分だけ」ということは思わなくていい、その中で新たな日本人像を変えていくのが息子の世代なのかなと。「日本人って何？」国籍とか日本語が話せるなど、いろいろな定義がありますが、「日本の小学校に通う」ことなのではないか、と個人的には思っているのですが、息子は日本の小学校に通わせると思いますが、息子の視点も含め自分の仕事の面でも新たな考え方ができると思います。

**村上** 先程は「将来」

という漠然としたものですが、「10年後」の具体的なイメージはありますか？

**山崎** 今自分が感じていることをドキュメンタリー制作というすごく難しいジャンルで表現したいと思っています。これ以上に自分が社会に貢献できる方法は他に考えられないので、多分この道を行きつつ、10年後には日本の大人達のドキュメンタリーも作り終え、又他の現場や海外の話とかもやっているかなあ、と思いますね。

**村上** どこに住んでいると思う？

**山崎** やっぱ拠点は今ところ日本……かな。贅沢な話ですが、たまに仕事で外に行くのがいいバランスかと思えます。でないと「当たり前前に凄い」ところが麻痺してきて気がつかなくなるので。10年後息子はまだ小学生、彼が小学校を終えたタイミングでどうするか、中学校からはもしかすると違う教育システムになるかもしれないと思いが、それも含めて、日本にいると思います。

**村上** エリックも大丈夫ですか？

**山崎** 彼も全く問題ないでしょう。周りの人達とはちよつと違う生き方を夫婦でしている感じはありますが、ただ

拠点としては、エリックも私も日本の方がいいです。異国の地でやる事もできますが、日本の社会に貢献したいという想いが私達にはあるという気がしています。

**村上** 子どもを育てる環境として日本は悪くないと思いますね。治安がいい、社会の安定とか、それに食べ物おいしいし保育園が素晴らしい。そこは日本が凄いいところ。最後にエマさんの夢は何ですか？

**山崎** 自分が伝えたい事を伝える環境を得て、自分の作品を観てくれる人や自分の感じたことを伝えられる場が増えて、結果として願っている方向に社会や未来が影響されるのが嬉しいので、自分なりに持っている感覚を多くの人達と更に共有していきたいですね。ドキュメンタリー作品というジャンルを通して、言葉だけではなく映像を通して、皆でよりよい未来を創っていく、結局は自分が生きてきた事よりも、より良い未来を残せるような活動としてドキュメンタリーに向き合っていきたいという想いです。

**村上** 今日はありがとうございました。次の作品も楽しみにしています。

**山崎** ありがとうございます。